



●CINEMA 『第4の革命』

監督=カール・A・フェヒナー

2010年/ドイツ、デンマーク、ノルウェー、フランス、スペイン、マリ、バングラデシュ、アメリカ、ブラジル、中国/83分

公式サイト <http://www.4revo.org/>



映画の企画発案者であり、狂言回し役でもあるヘルマン・シェーア氏（ドイツ連邦議会議員・社民党所属）は、インタビューにこう答えている。

「再生可能エネルギーで電力需要の100%をまかなえる。それが唯一妥当な選択だ」

それが大言壮語でないことを、『第4の革命』は具体的な事例を挙げて示している。デンマークのエネルギー自治の取り組み、アフリカ・マリ共和国の無電化地域での太陽光発電とバイオマス発電の取り組み、高級電気自動車というベンチャー、古い共同住宅をパッシブ・ソーラー・ハウスにリフォームする事業等々…。

声高なスローガンの替わりに、たびたび映画に登場する風車の美しいフォルムが、エネルギー過剰消費社会からの転換を促しているように見える。

そもそも「第4の革命」とはいかなる概念なのか？ 環境エネルギー政策研究所所長の飯田哲也氏によると「再生可能エネルギーへのシフトは、農業革命、産業革命、IT革命に次ぐ第4の革命」なのだという。自然環境の中で繰り返し起こる現象からエネルギーを得るものが再生可能エネルギーであるが、なぜそれが「第4の革命」と命名されるほど画期的なのか。

現代社会は、電力の大部分を火力発電と原子力発電によってまかなっている。火力は石油・石炭・天然ガス等の化石燃料に、原子力はウランに依拠しているが、それらは枯渇性資源（いずれ地球上から採り尽くされてしまう資源）である。

民間シンクタンク「ローマ・クラブ」が1972年、『成長の限界』において「現在のままで人口増加や環境破壊が続けば、資源の枯渇や環境の悪化によって100年以内に人類の成長は限界に達する。見込みの高い結末は、人口と工業力の突然の制御不可能な減少だろう」と警告したことは有名だ。70年代以降の環境保護運動は、この思想に粹付けされたものとも言える。

しかしもし世界が、枯渇性エネルギーから再生可能エネルギーへと100%転換したとしたら、この恐ろしいローマ・クラブの警告から人類は免れることができるのではないか？

あるいは、『成長の限界』の時代では言及されなかった温室効果ガスによる気候変動についても、明るい解決策となるのではないかと。「第4の革命」というイノベーションは、そんな壮大な希望を抱かせる出来事だ。

もちろん正確に言えば、「第4の革命」で枯渇性資源から脱却できるのはエネルギー部門だけであって、マテリアル（素材）については枯渇性を免れてはいない。太陽光パネルにしても、風力発電機にしても、金属や合成樹脂を消費する。地球が有限であるかぎり、成長の限界という「原理」から逃れることはできないが、マテリアルについても技術革新が期待されており（とくに蓄電池は脱レア・メタル化が求められる）、ローマ・クラブの警告はかなり緩和されるのではないだろうか。

大量消費社会は化石燃料に依拠してはじめて可能であった。そこから持続可能社会への転換の引き金は、再生可能エネルギーが引くのではないかと。

さて、その「第4の革命」を実現させるにあたって、石油業界・電力業界をはじめとして既得権益層の抵抗は根強いものがある。彼ら／彼女らの必死の抵抗を押し戻して、再生可能エネルギーを普及するにはどうしたらいいのか。

この点につき、カール・A・フェヒナー監督の姿勢は示唆的だ。彼は平和活動家として数々のデモに参加した経験がある。中距離核弾頭ミサイル配備や核廃棄物輸送反対デモに参加した際には、当局に逮捕された経験もある。

しかし、1991年より「方針転換」をし、戦争報道等悲惨な状況を伝えるより、解決方法を提示すべく持続可能性をテーマにTV番組やドキュメンタリー映画を制作するようになったという。ネガティブなことばかり叫んでも事態は解決せず、ポジティブな方向を示すべきだと言うのだ。これは、映画の中のブレベン・メゴー氏（デンマーク・フォルケセンター所長）の言葉とも符合する。

けっして「正解」が語られているわけではない。また「カタルシスを得る」ような映画でもない。だが、確実に希望を見出せる映画であることは間違いない。 **A**

文=森田一成（自然エネルギー千葉の会）